

# 伊江島における伝統的漁撈技術と考古資料の比較検討

盛本 勲

沖縄県教育庁文化財課

MORIMOTO Isao

Okinawa Prefecture Cultural Property division

## はじめに

筆者に与えられたテーマは、伊江島の民族考古学である。現在、沖縄県内のどの地域でも見られるように、伊江島においても植物採取や焼畑などのような伝統的農耕活動は全く行われていない状況にある。

伊江島では、近世前半の1630年頃から砂糖づくりが開始され、1952（昭和27）年に村営の製糖工場が設置されたことによって本格化していった。また、1968（昭和43）年頃には葉タバコが、1979（昭和54）年には複合作物（電照菊などの花卉）が導入された（照屋2008）。このように、農業基盤が変わっていく中で、伝統的農耕活動は衰退し、消滅して行ったのである。

しかし、漁業においては多少の伝統的漁撈技術を残している要素が窺えたことから、伊江島における伝統的漁撈技術についての調査を行い、漁撈活動の復元を試みることを目的とした。その手段としては、古老等からの聞き取り調査や、村史・民俗誌などの文献調査を行うとともに、伝統的漁撈技術と考古資料との比較検討を行った。

なお、調査にあたっては話者が魚種名を方言で話しているので和名を確認するために、新垣柴太郎・吉野哲夫著 1984『沖縄釣漁図鑑』新星出版を携帯して行った。これらの記名にあたっては、方言名で行い、括弧内に和名を記した。この記名法については、地形等の他の記名についても同様な方法を採用した。

## 1. 調査の概要

調査は、村教育委員会に紹介してもらった古老や自ら訪ね歩いて出会った古老からの聞き取りを行い、情報を積み重ねるとともに、得られた情報のクロスチェックを行い、より信憑性を高めることに努めた。しかし、伝統的漁撈技術を体験した明治～大正生まれの古老が年々減少傾向にあることなども起因し、調査は予期していた以上に容易ではなかった。

調査は、3年度におよんだが実質調査期間9日間である。この間に、下記の7人の古老から聞き取り調査を行った。その年齢構成は80代1人、70代3人、60代3人である。なお、年齢は調査時のものである。

話者 a：1927（昭和2）年生まれ。84歳。小さい頃から父親に付いて、漁業をなりわいとしてきた。伊江島の名誉指導漁業士である。第8代伊江村漁業協同組合長を努める。伊江島の追込漁業の歴史をすべて体験した漁師である（川島2008）。

話者 b：1934（昭和9）年生まれ。78歳。中学校卒業から父親に付いて、漁業をなりわいとしてきたが、現在は引退している。

話者 c：1936（昭和11）年生まれ。76歳。中学校卒業から漁業に従事してきた。20代の頃から網元の一員として、追込漁業にも従事した。

話者 d：1939（昭和14）年生まれ。72歳。中学校卒業から漁業に従事してきた。若い頃は網元の組の一員として追込漁業にも従事した。

話者 e : 1943 (昭和18) 年生まれ。68歳。中学校卒業から漁業に従事してきた。若い頃は網元の組の一員として追込漁業にも従事した。現在でも漁をなりわいとしている。

話者 f : 1944 (昭和19) 年生まれ。67歳。中学校卒業から漁業に従事してきた。現在でも漁をなりわいとし、モズク養殖漁を中心に行っている。

話者 g : 1948 (昭和23) 年生まれ。64歳。中学校卒業から漁業に従事してきた。現在でも漁をなりわいとし、モズク養殖漁を中心に行っている。

## 2. 島と周辺海域の地形学的特徴

漁撈活動を検討していくうえで、重要となってくるのが海岸地形の特徴や特質である。伊江島の海岸地形を概観すると、北海岸はサンゴ礁の発達が無で、海崖が縁取っている。とりわけ、北海岸中央部のくびれた部分は30~60mの急崖をなし、崖下にはワジと称される湧泉が所在し、一年を通して豊富な水量が得られる。一方、東西および南海岸では裾礁が取り巻き、干瀬やラグーンが発達し、南側~東側海岸では砂丘が形成、発達している。

河名俊男は、島および島周辺海域の地学的特徴として、下記の6点を挙げている(河名2009)。

- 1) 島は、北側から南側へ向けての傾動運動が見られる(北は更新世)(河名2001)。
- 2) サンゴ礁は、島の南側の海域に発達している。
- 3) 離水ノッチが発達している。
- 4) 砂丘は、とくに東側海岸を中心に発達している。
- 5) ビーチロックも発達している。
- 6) 北海岸のワジ(湧出)では、礫岩ビーチロックが見られる。海退(3000~4000年前)が示唆される。

島袋伸三・渡久地健によると、伊江島のサンゴ礁幅の平均値は238mで、タイプ別割合は干瀬型が28%、干瀬・イノー型が35%、イノー型が25%であるとする(島袋・渡久地1990)。三タイプの総計が100%にならないのはサンゴ礁を欠いている範囲、すなわち北海岸部分で、その割合は12%となっている。また、リーフ外の北西~南西海域、および南~南東海域には満潮時でも水深10~20m前後と比較的浅く、大潮や中潮などの際には干上がり、頂部が露出する(図1)ソネ<sup>(1)</sup>(水中離礁<sup>(2)</sup>)が6ヶ所存在する(図2参照)。それぞれのソネは、下記の名称が付され、漁師仲間にはカタカナ表記した方言名で呼ばれている。

### 北西~南西方海域

- ・ニシノソネ(北ノ曾根)・ニアサナー(ニアサナー)・ヘーノソネ(南ノ曾根)

### 南~南東方海域

- ・ミンナゾネ(水納曾根)・ナカンシ(中ノ瀬)・アメクゾネ(天久曾根)

このうち、ミンナゾネ(水納曾根)は、本部町水納島の西側海域に位置している水中離礁である。

これらのソネ周縁は磯状をなし、プランクトンや小魚等が寄り集まるため、これらを食するために種々の魚が寄ってくることから、最良の潜りなどの漁場となり、代表的な糸満漁法の追い込み漁が行わ



図1 露出したナカンシ

(中央部の白波が起った平坦なサンゴ礁地形)



図2 伊江島周辺の海岸地形と等深図（日本水路協会発行）

れる（鳥袋・目崎1986）。

次に、伊江島の漁民集落と南海岸の微地形をみて見る。河名俊男が指摘するように、島の南海域にはサンゴ礁が発達しているが、その形成は2000～2500calBP年前頃には安定的なリーフが形成されるとともに、礁嶺、礁池も形成された（河名2009）。そして、リーフの形成にともなって、新时期砂丘やビーチロック等も形成されたものと推定している。

島の専門的な漁民集落は、リーフの発達した南海岸に面して展開しており、東から阿良集落、具志集落（ウミンチュ集落。現在は川平集落に含まれている）、西江前集落となっている。阿良集落と具志集落はほぼ隣接しているものの、具志集落と西江前集落間は距離が離れている。

聞き取り調査による限り、網漁等における集落間の漁場の基本的な境はないとのことである。さらに、微地形を観察すると、川平集落の前の浜（現在は埋め立てられ、漁船の船揚げ場となっている場所）や西崎漁港一帯は小規模な入り江が多く、変差に富んでいた。また、ナガラの前（国指定史跡：具志原貝塚～ナガラ原東貝塚の間）は1 km 程の砂丘が連続している。

### 3. 漁撈活動について

#### 3.1. 網漁業

聞き取り調査の結果、伊江島での網漁業の種類は7種類が知られた。以下に、その内容を述べる。

投網漁業：ウチアミと称した。主として、スフ（アイゴ科の稚魚）を対象とした網漁業であるが、これのみに限定されるものではない。スフ漁は、旧暦の5月27日～6月3日、6月27日～7月3日に

スフが、決まって早朝の満潮に乗って大群をなして沿岸に寄ってくることをスフマーイと称し、その習性を狙って漁を行った。漁はイノーの浅海で、スフが泳いでいく前方へ袋網を投げて捕獲した。宮城幸吉によると、スフは全長4～4.3cm程の中型のものを指していると言われている（宮城1990）。他に、ナガラ（ナガラ原貝塚）の前あたりの浜で、夕方の満潮の際、ハナブッカー・エーグァー（アイゴ類の成魚）を対象として行った。錘は鉛の錘を使った。

**刺し網漁業：**表層魚のトビウオを対象とした網漁業である。網の長さは127尋程（約200m）、9.5尋程（約15m）の規模であった。トビウオは追込漁業でも捕獲したが、これは潮に流しながら捕獲する網漁法で、潮上から潮を横切るようにして網を張り、魚を網に刺して捕獲する。

**ヒタミラサー：**追込漁業の一種で、引き潮をねらって魚を留める漁法である。この漁法は、大潮をねらって行った。主対象魚は、ブダイ科やエーグァー（アイゴ）、ニザダイ科、サザナミハギ（クチクー）であった。

**シ（ヒ）チャングァー網漁業：**パンタタカーとも言う。この網漁業も規模の小さい追込漁業である。長さ約50m、高さ約3mの1枚網を使用し、3～5人で行った。漁法は、リーフ内の浅瀬で水面をたたいて魚を威嚇して追込んで捕獲した。対象魚はイラブチャー（ブダイ類）やエーグァー（アイゴ類）であった。

**ミズンペー網漁業：**回遊魚のミズン（キビナゴ）を対象とした網漁業である。大正の終わり頃の最盛期の網の規模は、長さ100尋余（約152m）、高さ8尋余（約12.1m）の大規模なものであった。この規模の網を舟に乗せて、2～4人乗り込み、ミズンが通る水深7～8尋（10.6～12.1m）の所に一箇所を開けたD字型状に設置し、設置後は潮流によって網の形が変形しないように、錨を入れて数カ所を固定する（図3）。

ミズンは群れをなして、日の出前後と日没前後になるとリーフの外側沿いを通り、昼や夜になると水深20（約30m）～30（約45.5m）尋の水深を回遊するため、その途上に網を設置しておくで開けた箇所から網に入ってくる。ミズンが網に入ったら、ワイカシーと称する8斤程（約4.8kg）の円形の石を縄でくくったものを網の中に落とす。この投げ上げを繰り返すとミズンは驚き、網目に頭を突っ込んでしまう。網目に突き刺さると鱗が剥がれ落ち、銀色の鱗が海中に散乱するとミズンはますます驚いて網に突っ込んでしまうという習性を利用したものであった。

網の設置場所はくじ引きや輪番制で決めた。伊江島周辺でのミズンペー網漁業の漁場は、島の南西部から南部を経て南東部に至る範囲のリーフ外縁に接した礁斜面一帯で、ポイント間の間隔は、西崎漁港より西側においては長めではあるが、南海岸では若干間隔が狭まるものの、比較的等間隔で配置されていた。

**グルクン追込網漁業：**アギヤーと呼ばれる伝統的な追込漁業である。対象とする魚種等によって名称が付けられるが、基本的な構造は袋網とハ字状に広がる長方形の網を何枚か継いだ袖網からなる網を使用し、袖網側から袋網に向かって追い込んで行き、袋網近くに達すると潜って引き上げる漁法である（図4）。トビウオを対象とした場合は、トビウオ追込漁業と称する。

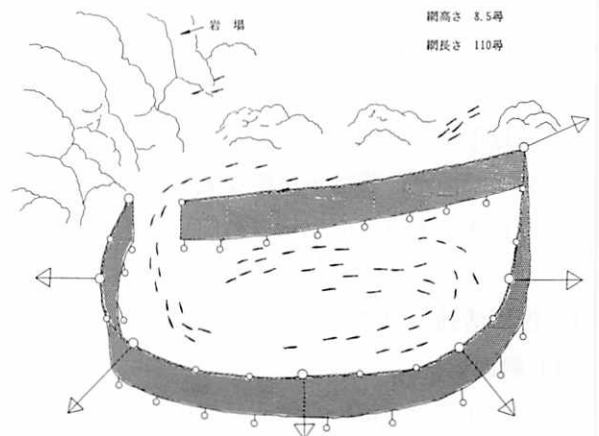
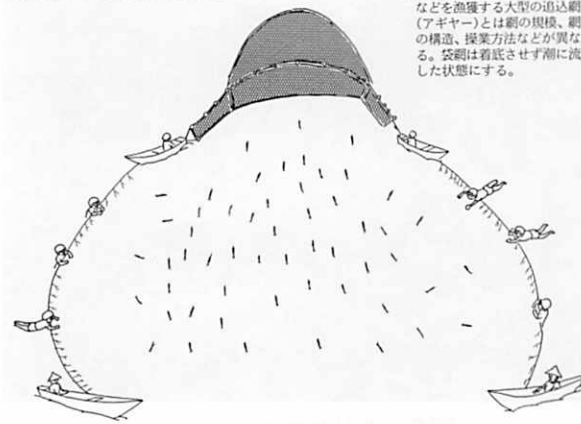


図3 ミズンペー網  
(伊江村漁業協同組合1993 p102引用)

戦前のトビウオ追込網漁業



※トビウオ追込網は、グルクンなどを漁獲する大型の追込網（アギヤ）とは網の規模、網の構造、操業方法などが異なる。夜網は着底させず潮に流した状態にする。

図4 戦前のトビウオ追込漁業  
(伊江村漁業協同組合 p100引用)

グルクン（タカサゴ）を対象とした網元の組は、最盛期には2グループあった。1グループの規模は、サバニ（刳船）が14～15隻、乗組員総数は多い時で40～50名程、少ない時で30～40名程が操業に従事した。漁場は、基本的には島から直線距離にして5～10km沖のソネであったが、まれに北方に所在する伊是名島や伊平屋島あたりまで行って操業することもあった。最後に行ったのは、昭和60年頃であったが、操業人数が1グループ12～13名まで減少し、その後解散した。漁期は概ね産卵期の旧暦2～5月頃であった。

### 3.2. 突き漁業

突き漁業はタコ突き、コブシメ突き、魚突きなどを行った。

タコ突き漁業：タコ突き漁業には、船上から箱眼鏡で海底を覗きながら鉈や鉤を付けた棒でタコ突きを行う方法と、直接潜ってタコ突きを行う二通りの捕獲法があるが、聞き取りを行った話者は直接潜って捕獲していた。主な漁場は、島の東側一帯のリーフと、具志原貝塚前のイノー～西側一帯であったが、それ以外の場所でも捕獲できた。各々の漁場には棲み分けが決まっていたおり、決して他人の漁場を侵すことはなかった。

漁期と時間帯は、11月頃～翌年の5月頃まで昼間で、時期的に5月を過ぎるとタコは産卵のために深海へ移動するので、捕獲のピークは過ぎるが、夏場でも捕れないことはない。

捕獲法は、まず船上または徒歩により腰から胸程まで浸かる深さの所で（図5）、箱眼鏡でタコを見つけると、船上の場合だとすぐに海に飛び込んで突いて捕獲した。捕獲用の漁具は、木製の棒に反しのない鉈を付けた全長5尺程（約2m）ものと、鉤を付けた2.1尺程（約80cm）の両者があり、手で持つ部分にはリング状になったゴムが付けられていて、発射装置となっていた。タコを見つけると、初めに鉈でタコの頭部を突いた後、鉤の付いたもので引っ掛けて取り上げた。

コブシメ突き漁業：素潜りによりコブシメ（コウイカ目に属するイカ）を対象とした突き漁業である。漁期は、タコ釣り漁業と同時期の11月～翌年の5月頃までであった。昼間と夜間のいずれも漁を行ったが、当然のことであるが、夜間の漁には水中電灯が欠かせなかった。



図5 伊江島東海岸でタコ突きを行っている漁師

鉈は反しの付いたものであった。昼間用と夜間用とは長さが異なり、昼間用は鉈と木製の棒を含めた長さは10.5尺余（約4m）の長いもので、夜間用は昼間用の半分程の長さの5尺程（約2m）で昼間用のものの半分の長さであった。鉈先には工夫が懲らされ、一旦コブシメに突き刺さると反しの部分が横に開き、容易に抜くことができないような仕掛けになっていた。また、コブシメに突き刺さった状態で手から鉈を離しても鉈先の反対側（木製の棒の手で持つ側）が1尺程（約38cm）

水面に出るように浮力を調整して造らなければならない。理由は、海底に棲息するコブシメを突いた後、息切れしてしまい、銚を手放して息継ぎのため水面へ浮上した場合でも、コブシメは突き抜かれた状態で徐々に水面へ浮上してくるようになっていくという。昼間用、夜間用のいずれの銚にもゴムで造った発射装置を付けていた。

**魚突き漁業：**主対象とした魚類はブダイ類、ハタ類、カワハギ、テングハギ、スジアラなどであった。銚は、反しのない銚を使用し、銚と木製の棒を含めた長さは10.5尺余（約4 m）の長いもので、手で持つ側にはゴム製の発射装置が付けられていた。

この魚突き用の銚は、手から離しても海底に垂直状態で立つように工夫して造った。このようにすると、魚類を突いた際、例え銚から手を離しても魚が逃げ出すことはなかったからである。ほとんどの対象魚類が同様であるが、特にブダイ類を突くには満潮時が最も良い。理由は、リーフ外で活動していたブダイ類は、満潮とともにイノーに入ってきて縁部で餌を食べているが、その際は警戒心が薄れ、人が接近しても気づくのが遅くなるので、この時がねらい時だという。



図6 ルリハコベ

(新里・萬原編2002 p.73引用)

### 3.3. その他の事例

ここでは、聞き取りできた範囲内の魚種と漁法を記す。

アイゴ科アイゴ属のハナアイゴは、夕方の満潮時の際、投網で捕獲する。

ウツボは、潜っての突き漁でも捕獲可能であるが、釣漁でも可能である。釣り漁の餌は、主としてヤドカリを用いるが、特に定まっているわけではなく、何でも良い。

モンガラカワハギ科は、追い込み漁業で捕獲した。モンガラカワハギ科は、群れをなして遊泳、棲息しているため、一度の漁で大量に捕れた。まれに、モンガラカワハギも捕れるが、主体はアカモンガラである。ハリセンボンも、狙って捕獲するものではない。他の魚種に混じって、追込網に入ったものを捕獲した。ハタ類は、潜っての突き漁が主体である。

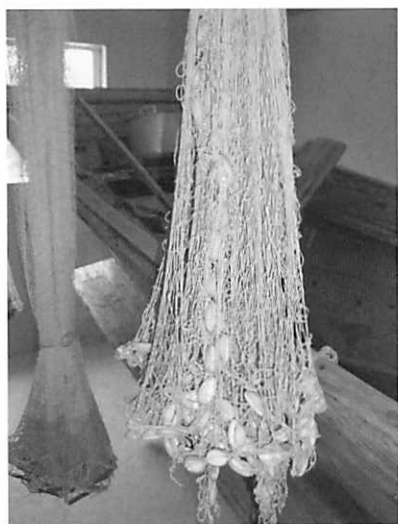


図7 ハナマルユキ装着の網

(いーじま山山民具資料館蔵)

### 3.4. 毒流し漁

干潮時のリーフ内の潮だまりに残った魚類を植物や樹木の葉汁や樹液を流し、植物毒で魚を麻痺させ、魚が浮いてきたところを拾い集める（捕獲する）漁法である。伊江島では、ササ漁もしくはサーインジと称している。

県内で毒流し漁に使用される植物等は、イジュの木の樹皮、サンゴジュの葉、リュウキュウガキの果実、ミフラギ（オキナワキョウチクトウ）の枝葉、ルリハコベの全草が知られる。これらは、いずれもサポニンを含んでおり、魚に対して強い麻痺作用を

有している。伊江島にはイジュやサンゴジュ、オキナワキョウチクトウ、リュウキュウガキ等の天然分布がないため、これらを使用した毒流し漁は行われなかった。

伊江島では、ワカミンナもしくはクルクサ（ルリハコベ）の全草（図6）やササカンサ（ハマボッス）を使用して行っていたが、この漁業に携わっていた人々は陸の人、すなわち農業従事者がよく行っていた。ウミンチュ（専門漁師）が行っているのはみたことがない。

漁法は、あらかじめ農耕地や道路脇などからワカミンナもしくはアーンサーを採取しておき、干潮になった頃を見計らって、サンゴ礁内の広さ1～2坪、深さ50cm程の壺のような潮だまりの縁の岩礁に叩石等で叩いて汁を出し、潮だまりの中へ流し込む。しばらくすると、溜りに残った魚群がプカプカ浮いてくるので、それを捕獲した。

#### 4. 魚網錘の変遷

伊江島における魚網錘の変遷をみると、タカラガイ製錘は大正の中頃、小橋川さんという方（寄留民）が来島して伝授したと伝えられている。錘に使用したタカラガイの種類は、ヒメヤクシマダカラが主体で、ヤクシマダカラ、ハナマルユキ、キイロダカラ（図7）等も若干含まれていた。それ以前は、シャコガイ製等の二枚貝を装着した錘であったかと思えるが、判然としない。

その後、焼物（瀬戸物）の錘が導入され、一時陶製錘が変わったが、海底地形が岩礁等になっていることから、それらに当たって割れたりしたため、使いものにならなかった。戦後になって鉛錘に変わり、現在に至っている。

#### 5. 貝類の採捕活動

ヤコウガイやタカセガイ、チョウセンサザエ等の大型貝類の採捕は、その生態から礁斜面に棲息しているため、島の西～西北、東～東北側や東から南側を経て、西側のリーフ外縁が漁場の中心となってくる（図8）。タカセガイは、水深20m位までも棲息しており、深い所に棲息しているものほど大きかった。岩場でも滑らかな岩の方によく棲息しており、ゴツゴツした岩場には少ない。10畳敷き程の平坦な地形があり、そこでよく採れたとのことである。

近年では島周辺での棲息数が激減していることもあって、島の南海に位置している本部町の水納島周辺の干瀬まで出かけて採捕している。漁法は素潜りにより、5時間ほど潜って約10kgの漁獲高で



図8 毒流し漁および大型巻貝類採捕漁場  
（国土地理院 1/25000地形図「伊江島」による）



図9 いーじま山山民具資料館の戸外に保管されていたヤコウガイの殻

表1 ナガラ原東貝塚出土の魚種一覧

調査資料	目	科名	属・種名	出土比率	漁法など
①	スズキ目	ブダイ科	アオブダイ属	83.40%	追込漁。潜水による突き漁。
	スズキ目		イロブダイ属		
	スズキ目		不明		
	フグ目	モンガラカワハギ科	不明	16.60%	追込漁。主体はアカモンガラで、モンガラカワハギはたまにしか網にかからない。
②	ニシン目	ニシン科			潜水による突き漁。釣漁（餌は何でも良い）
	ウナギ目	ウツボ科			
	トウゴロウイワシ目	トウゴロウイワシ科			潜水による突き漁が主体。追込み網に入ることはない。
	スズキ目	ハタ科			
	スズキ目	ベラ科			追込漁。あまり美味しくない。鱗が剥ぎにくい。
	スズキ目	アオブダイ科	アオブダイ属		追込漁。潜水による突き漁。
	スズキ目	ブダイ科			追込漁業。潜水による突き漁。
	スズキ目		アイゴ属		ナハアイゴ。満潮の際、投網で捕獲。
	スズキ目	ニザダイ科			ヒタミラサー（干潮をねらって魚を留める漁法）で捕獲
	フグ目	モンガラカワハギ科			追込漁業。主体はアカモンガラ。モンガラカワハギはたまにしか網にかからない。
③	ニシン目	ニシン科			潜水による突き漁。釣漁（餌は何でも良い）。
	ウナギ目	ウツボ科			
	ダツ目	サヨリ科			追込漁業。あまり美味しくない。鱗が剥ぎにくい。
	トウゴロウイワシ目	トウゴロウイワシ科			
	スズキ目	ベラ科			追込漁。潜水による突き漁。
	スズキ目	ブダイ科			追込漁。潜水による突き漁。
	スズキ目	アオブダイ科	アオブダイ属		追込漁。潜水による突き漁。
	スズキ目		アイゴ属		
	スズキ目	ニザダイ科			ヒタミラサー（干潮をねらって魚を留める漁法）で捕獲
スズキ目	タイ型	フエフキダイ属？			
	フグ目	モンガラカワハギ科			追込漁。主体はアカモンガラで、モンガラカワハギはたまにしか網にかからない。
④	ダツ目	ニシン科			冬場中心の漁業。オキザヨリは釣漁業でも可。
	スズキ目	ハタ科			
	スズキ目	アジ科			追込漁。
	スズキ目	チョウチンウオ科	ヨコシマクロダイ？		
	スズキ目	フエフキダイ科			追込漁。
	スズキ目	ヒメジ科			
	スズキ目	ベラ科			
	スズキ目	ブダイ科			
	スズキ目	スズメダイ科			
	スズキ目		アイゴ属		
	スズキ目	ニザダイ科			
	フグ目	モンガラカワハギ科			

調査資料 ① 2012報告書（北1東1・北1西1グリッド）

② 2011報告書（TT10）

③ 2010報告書（TT9）

④ 2003：科研報告書「先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－」



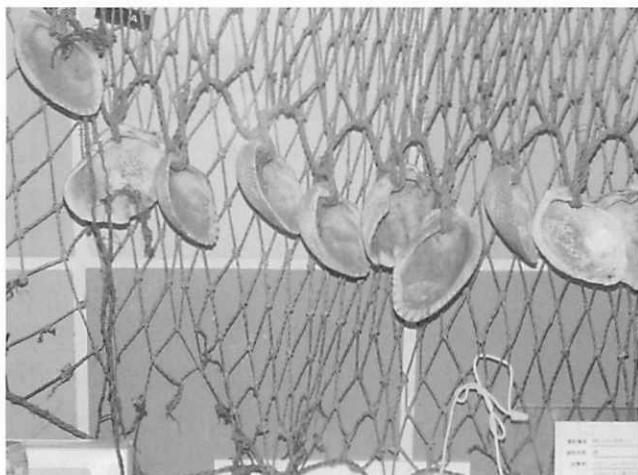


図10 国営沖縄記念公演海洋文化館展示のパプアニューギニアの網

(ヒメジャコ製1点に対して、2～4点のフネガイ科製を装着)

漁業によって捕獲可能な魚種である(表1)。

網漁業は、出土量は必ずしも多くはないが、貝製品の中で「有孔製品」として報告されているカラガイ、リュウキュウサルボウ、ウミギクガイ科等の比較的軽量の二枚貝の殻頂部付近に粗孔を穿った一群と、これらに比すると多少重量の増すヒメジャコやシラナミ等のシャコガイ科の殻頂部付近に粗孔を穿った製品が出土していることから、両者を組み合わせた錘を装着した網(図10)での捕獲を想定したい。

網の形態としては、略長方形の一枚網で、満潮とともに休息等でイノーに入ってきた魚が、干潮とともに外洋に遊泳にいく習性を利用したもので、サンゴ礁内のワリ(縁溝)の外洋側に網を張り、イノー側から追い込んで捕獲する漁法である。この捕獲法は、本調査での聞き取りでは得られていないが、調査を行った時期が早い座間味村慶留間での事例報告からの推定によるものである。報告によれば、網の規模は長さ10m前後、高さ2m前後で、網の裾部に一尺(約37.9cm)間隔ぐらいでヒメジャコ製の錘を付けたパンタタカーという追い込み漁に用いるものである。

漁は、7～8人グループでイノーの水深2～3m程のサンゴ礁の割れ目を利用して網を張っておき、ワリに潜って陸側から外洋側へ向けて魚を追い込んでいき、最後の2人が網の両端に待機し、魚が掛かったところを網を二重折りにして水面へ引き上げ、魚を舟に移した(上江洲1972)。

なお、上江洲均の報告によると、この網の話は、伊平屋村島尻でも聞いたが、今ではおそらく座間味にだけ残る話かも知れない、と記されていることから、報告作成時の沖縄県の本土復帰時点の40年前頃にはあるいは県内各地において貝製錘から陶製錘、鉛錘に移行していたものとみられよう。

しかし、陶製錘は底質がサンゴ礁地域の海域では中層や低層魚を対象とする網には岩礁等に当たって割れてしまい、使いものにならなかったという話は伊江島だけでなく、各地で耳にする。ただし、表層魚のトビウオやダツ等を対象とした浮かし網には使用したようである。ウツボ科は潜っての突き漁もしくは釣漁で、ハタ科も潜っての突き漁が主体で、追い込み漁等の網漁で捕獲することはまれであるとのことである。

出土漁具には、銚や釣針等は皆無である。この問題をどのように考えるか、という疑問が浮上してくる。今後の検討課題として、指摘しておきたい。

ある。

## 6. 伊江島における貝塚時代後期遺跡出土の魚類遺存体との比較

### 6.1. ナガラ原東貝塚出土の魚類遺存体と出土漁具からみた漁法

ナガラ原東貝塚の調査によって出土した魚類遺存体は、6目15科3属1種である(高松・弘中編2003、松崎編2010、柴田編2011)。出土資料に碎片が多いことに起因するものか、多くが目・科・属レベルまでの同定で止まっており、種レベルまで同定できているものは多くないようである。これらの魚種と出土漁具の対応関係をみると、出土魚種の多くが網

## 6.1.2. 伊江島の貝塚時代後期遺跡出土の魚類遺存体と伝統的漁法の検討

周知の通り、伊江島の南側海浜にはナガラ原東貝塚と時期的に近い、あるいは性格的に類似すると推される貝塚が少なくない。これまでに発掘調査が実施されている貝塚としては、阿良貝塚、具志原貝塚、ナガラ原東貝塚、ナガラ原西貝塚が知られ、出土魚類遺存体の内容も明らかになっている。ここでは、これらの貝塚出土の魚類遺存体と伝統的漁法との関係について検討する。なお、ナガラ原東貝塚については前項で検討したため、阿良・具志原・ナガラ西の3遺跡について検討する。

はじめに、阿良貝塚であるが、出土魚種は2目7科5属5種が同定されている(安里編1983)。層位別出土状況ではⅣ層が最も多く、Ⅰ層・Ⅲ層は少ない。出土量の多いⅣ層ではスズキ目フエダイ科の出土が顕著である。しかし、Ⅴ層・Ⅵ層ではフエダイ科は全く出土しておらず、Ⅴ層ではブダイ科が75.5%と高い比率を占めている。一方、Ⅵ層では他層に比してスズキブダイ科の占める比率は46.4%と低く、逆にスズキ目ハタ科の出土が他層に比べて高くなっており、Ⅵ層出土魚骨の21.4%を占めている。このように、出土魚種に層位ごとの多寡のあったことが認められるが、このことが何を表しているのかについては判然としない。

出土魚種を漁法との関係でみると、いずれの種も網漁で捕獲可能な魚であることから、穿孔貝と報告されているオオベッコウガサガイを除く、リュウキュウマスオガイ、リュウキュウザルボウ、シレナシジミ、メンガイ、ヒメジャコ等を錘とした網によって捕獲されたものであろう。

聞き取り調査による限り、ハタ科は網漁でも捕獲は可能であるが、潜っての突き漁が主体であるとの情報を得ていることから、突き漁も視野に入れて考えなければならないが、ナガラ原東貝塚同様、当該貝塚においても突き漁に使用されたとみられる漁具は認められない。

次に、具志原貝塚であるが、出土魚種は5目8科11属11種が同定されている(岸本編1997)。貝塚の堆積層は5枚からなり、うち2～4層が遺物包含層となっている。4層は基盤(地山)層への移行層であるとともに、縄文前期併行期の土器が出土していることから、2・3層出土魚骨を検討対象とする。

当該貝塚では阿良貝塚でみられたような魚種の層位別変遷はみられず、2・3の両層において若干の種の有無は認められるものの、主体種の出土状況は同様である。最も主体を占めている種はスズキ目のブダイ科で、他種の出土頻度は高くない。特記すべき種として、スズキ目サバ科のカツオがある。報告者も指摘しているように、県内貝塚の出土例としては珍しい種である。カツオは、リーフ外の外洋を黒潮暖流に乗って遡上する回遊魚であり、リーフ内の礁湖に入ってくることはないことから、外洋まで出かけていかなければ捕獲できない魚種である。

出土魚種を漁法との関係でみると、主体を占めるスズキ目のブダイ科や同目のフエダイ科、ベラ科、ハタ科、フゲ目のモンガラカワハギ科、ハリセンボン科は、貝製漁網錘と報告されているソメワケグリ、リュウキュウマスオ、リュウキュウサルボウ、メンガイ、シラナミ、ヒメジャコ、シレナシジミ、ウチワガイを錘とした網によって捕獲されたものであろう。ハタ科については、阿良貝塚で指摘した点については同様である。そして、カツオはサバニ様の刳船でリーフ外の外洋に出て、釣り漁でなければ捕獲できないはずである。そのため、釣り針が必要となってくるが、出土遺物に釣り針と認められるものは出土していない。課題として指摘しておきたい。

最後にナガラ原西貝塚であるが、出土魚種は5目10科7属5種が同定されている(安里他1979)。基盤まで含めて貝塚の堆積層は9枚確認されているが、遺物包含層はⅢ～Ⅶ層までの5枚ある。主体種のスズキ目ブダイ科の出土状況を見てみると、Ⅴ層が最も多く、Ⅲ、Ⅶ、Ⅳ層と続く。一方、ブダイ科を除いた魚類の顎骨数でみると、Ⅲ層が最も多く、Ⅴ、Ⅶ、Ⅳ層と続く。両者において、若干の

表2 伊江島の貝塚時代後期遺跡出土の魚種一覧

## ① 具志原貝塚 (岸本編1997)

目	科名	属名	種名	漁法など
ネズミザメ目の一種				
ウナギ目	ウツボ科	ウツボ属の一種		潜水による突き漁。釣漁 (餌は何でも良い)。
スズキ目	サバ科	カツオ属	カツオ	
スズキ目	イサキ科	コショウダイ属の一種		
スズキ目	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ属	ヨコシマクロダイ	
スズキ目	フエフキダイ科	フエフキダイ属	ハマフエフキ	
スズキ目	ベラ科	タキベラ属	タキベラ	追込漁。あまり美味しくない。鱗が剥ぎにくい。
スズキ目	ベラ科		ベラ科の一種	追込漁。あまり美味しくない。鱗が剥ぎにくい。
スズキ目	ブダイ科	ハゲブダイ属	ナンヨウブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ブダイ科	イロブダイ属	イロブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ブダイ科	アオブダイ属	ナガブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ハタ科		ハタ科の一種	潜水による突き漁が主体。追込み網に入ることはない。
スズキ目	ハタ科	マハタ属の一種		潜水による突き漁が主体。追込み網に入ることはない。
フグ目	モンガラカワハギ科	モンガラカワハギ属	モンガラカワハギ	追込漁。主体はアカモンガラ。モンガラカワハギはたまにしか網にかからない。
フグ目	ハリセンボン科		ハリセンボン科の一種	狙って捕獲するものではない。他の魚種に混じって、追込網に入ったものを捕獲

## ② ナガラ原西貝塚 (安里他1979)

目	科名	属名	種名	漁法など
エイ目				
ウナギ目	ウツボ科			潜水による突き漁。釣漁 (餌は何でも良い)。
ダツ目	ダツ科			
スズキ目	アジ科			
スズキ目	タイ科	クロダイ属	ミナミクロダイ	
スズキ目	フエダイ科			
スズキ目		フエダイ属の一種		
スズキ目	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ属	ヨコシマクロダイ	
スズキ目	フエフキダイ科			
スズキ目	ベラ科			追込漁業。あまり美味しくない。鱗が剥ぎにくい。
スズキ目	ブダイ科	イロブダイ属	イロブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ブダイ科	ハゲブダイ属	ナンヨウブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ブダイ科	アオブダイ属	ナガブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
フグ目	モンガラカワハギ科			追込漁。主体はアカモンガラ。モンガラカワハギはたまにしか網にかからない。
フグ目	ハリセンボン科			狙って捕獲するものではない。他の魚種に混じって、追込網に入ったものを捕獲。
スズキ目	ハタ科	ハタ属の一種		

## ③ 阿良貝塚 (安里他1983)

目	科名	属名	種名	漁法など
スズキ目	フエダイ科			
スズキ目	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ属	ヨコシマクロダイ	
スズキ目	ベラ科			追込漁業。あまり美味しくない。鱗が剥ぎにくい。
スズキ目	ブダイ科	アオブダイ属	ナガブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ブダイ科	イロブダイ属	イロブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ブダイ科	ハゲブダイ属	ナンヨウブダイ	追込漁。潜水による突き漁。
スズキ目	ハタ科			潜水による突き漁が主体。追込み網に入ることはない。
フグ目	モンガラカワハギ科	モンガラカワハギ属	モンガラカワハギ	追込漁。主体はアカモンガラ。モンガラカワハギはたまにしか網にかからない。
フグ目	ハリセンボン科			狙って捕獲するものではない。他の魚種に混じって、追込網に入ったものを捕獲。

移動はあるものの、いずれにおいてもⅣ層の出現頻度が低いことは共通している。

本貝塚でも特記すべき種がある。ダツ目のダツ科であるが、該種は表層魚であることから、流し網や浮かし網等の表層魚を対象とした網での捕獲となる。このため、ブダイ科等を対象とした網漁とは異なる漁法での捕獲となる。網漁の分化を示唆しているのか、興味深い資料と言えよう。主体種のブダイ科、あるいはこれに次ぐフエフキダイ属は、報告はないがシャコガイ等の二枚貝の殻頂部に粗孔を穿った製品を錘として装着した網によって捕獲されたであろう。

## 7. おわりに

伊江島の漁撈活動のうち網漁業、突き漁業、毒流し漁業、貝類の採捕活動についての調査結果を述べた。網漁業は7種類を知り得ることができたが、それぞれの漁法は規模や地形や潮流等の変化、棲息または移動する魚種の習性に使い分けられており、自然に関する漁民の豊かな知恵や知識に支えられていたことが判る。ちなみに、本部町備瀬では17種類の漁法が確認されていることから（渡久地2010）、聞き取り事例の増加によって種類数が増えることは十二分に予測される。また、魚種によって、網漁（追い込み漁、流し網若しくは浮かし網）、突き漁、釣り漁の異なった漁法で捕獲されていることが判る。そして、網漁に使用される魚網錘は、タカラガイ製錘が導入されるのは大正中期であることから、それ以前は出土品に見られるようなカワラガイ、リュウキュウサルボウ、ウミギクガイ科とヒメジャコやシラナミガイ等のシャコガイ科を組み合わせた二枚貝製錘を使用していたものと考えられる。

突き漁業は、捕獲対象物によって3種に使い分けられている。いずれも銚子を使っての捕獲法であるが、銚子の形態がタコ突き漁業と魚突き漁業は反しのない形態のものであるのに対し、コブシメ突き漁業は反しの付いた形態のものであることが判った。また、タコ突き漁業は銚子の他に、鉤の付いた漁具がなければ捕獲できないことも明らかとなった。しかし、出土漁具から見た場合、突き漁業に関する資料は出土していない。どのように解すべきか。

ヤコウガイやチョウセンサザエ等の大型巻貝は、砂丘の発達が弱く、岩礁の発達した島の東西海域、およびリーフの未発達な北海岸の礁斜面で採捕したことが判る。これらのエリアが伝統的な採捕場所であったようであるが、生息数の減少等の要因から、近年は島の南海上に所在する水納島周辺での採捕も増えてきている。

毒流し漁業は、伊江島では専業漁民が行っている漁法でないことは既述した通りである。しかし、本格的な漁法、すなわち専業として行われている地域もある。奄美諸島・喜界島の事例で、報告によると喜界島ではサーインジと称され、イジュノキ（島には産しない）の古材を鉋で削って潮溜りに入れて行うとのことである（小野1993）。この漁撈は、先史時代において存在した可能性は低くないと考えるが、考古学的な実証には大きな困難を伴う。すなわち、遺物として確認できるものは、既述したように敲石のみである。リーフ上で安山岩製の敲石が採集されることが少なくないが、これらの時間的判定ができないのが残念である。

最後になるが、漁撈活動においては船の問題が重要になってくることは多言を要しない。伊江島では1973（昭和48）年頃から従来の木造のサバニ（ハギ舟）から徐々に繊維強化プラスチック（FRP）船に切り替えられ、現在漁港では木造船を目にすることはほとんどない。切り換えの主な理由は、維持管理等のようである。このようなこともあって、船に関する調査は行っていない。機会を見て調査を行っていきたいと考えている。

## 注

- (1) 標準語ではソネになる。ソネは全国各地の水域の地名として分布しており、水域地名が姓名ととなっている一例としても挙げられる(島袋・目崎1986)。
- (2) 浅い礁湖だけで中央島が存在せず、円形または卵形のさんご礁地形。一般に、台礁より小規模の地形で、礁湖中に孤立した礁として存在する(河名1983)。沖縄では波浪の弱い内湾部に離礁がみられ、伊江島南部海岸および本島半島西部の渡久地沖などの孤立礁が離礁例として挙げられている(河名1983、島袋・目崎1986)。

## 文献

- 安里嗣淳・他 1979「伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書 概報篇 自然遺物篇」『伊江村文化財報告書第8集』、伊江村教育委員会
- 安里嗣淳・編 1983「伊江島阿良貝塚発掘調査報告 The excavation of ARA shell mound on IE Island」、『沖縄県文化財報告書第48集』 沖縄県教育委員会
- 伊江村史編集委員会 1980「伊江村史 上巻」伊江村役場
- 伊江村史編集委員会 1980「伊江村史 下巻」伊江村役場
- 上江洲均 1972「沖縄の貝具」『琉球政府立博物館館報』No.5 pp.56～62、琉球政府立博物館
- 大城知善 1974「伊江島史話」『月刊 青い海』第4巻第7号(通巻35号) pp.118～128、(株)青い海出版社
- 小野重朗 1993「喜界島の生活伝承 十二、植物毒で魚をとる」『南日本の民俗文化3 生活と文化 小野重朗著作集』 pp.213～214、(株)第一書房
- 河名俊男 1983「離礁 りしょう」『沖縄大百科事典』下巻 p.840、沖縄タイムス社
- 河名俊男 2001「平成12年度助成研究報告 沖縄トラフの拡大運動からみた琉球列島中北部の完新世傾動運動 Holocene Tilting in the Northern and Central Ryukyu Islands, as Deduced from Expansion of the Okinawa Trough」『地学雑誌』第110巻3号 pp.433～438、東京地学会
- 河名俊男 2009「伊江島研究会資料」(2009年8月25日に開催された本共同研究にかかわる研究会資料)
- 川島秀一 2008「第四章 沖縄の追込漁 伊江島の追込漁 トビウオの追込漁 追込漁の生活」『追込漁(おいこみりょう)』 pp.176～183、法政大学出版局
- 岸本義彦・編 1997「伊江島具志原貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第130集』、沖縄県教育委員会
- 熊本大学文学部考古学研究室 2003「平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書 先史琉球の生業と交易-奄美・沖縄の発掘調査から- 改訂版 6～7世紀の琉球列島における国家形成過程解明に向けた実証的研究」
- 高松あゆみ・弘中正芳編 2010「ナガラ原東貝塚6」『考古学研究室報告』第45集、熊本大学文学部考古学研究室
- 柴田 亮編 2012「ナガラ原東貝塚8」『考古学研究室報告』第47集、熊本大学文学部考古学研究室
- 島袋信三・目崎茂和 1986「総説 島の地形と地名 サンゴ礁海域の地名」『角川 日本地名大辞典』47 沖縄県 pp.29～32、角川書店
- 島袋信三・渡久地健 1990「イノアの民俗特集 イノアの地形と地名」『民俗文化』第2号 pp.243～264、近畿大学民俗学研究所
- 新里孝和・嵩原健二編 2002「伊江島の植物図鑑 The Picture Guide Book of Plants in Ie Island」伊江村教育委員会
- 照屋善市 2008「概説・論考編 近現代における伊江島の諸相 第9章 年表でみる復帰前後以降の農林水産業の展開」『伊江村史 2 回顧録・概説・論考編 伊江島近現代史の諸相～「伊江島史」再構築のために～』 pp.298～312・330～339、伊江村役場
- 渡久地健 2010「サンゴ礁の地名図-漁民が刻んだ海の記録 上・下」『沖縄タイムス』、5月11日(日)～12日(水)

第Ⅱ部

文化、沖縄タイムス社

宮城幸吉 1990「イノアの民俗特集 スクおよびスクガラスについて」『民俗文化』第2号 pp.293～305、近畿大学民俗学研究所

松崎友理編 2011「ナガラ原東貝塚7」『考古学研究室報告』第46集、熊本大学文学部考古学研究室